

(国内研修)

地方青年の文章回覧誌における地域的多様性の研究

——地方文章回覧誌と「訓詁」志向——

教授 木戸雄一

一はじめに

「文学」は「文壇」や「文学史」の中にのみあるのではない。「文壇」中心の「文学史」は、「文学」の担い手を書き手たる作者と読み手たる読者へと分割し、発信—受信の階層構造を基本的なモデルとしてきた。読者の書き手としての局面は雑誌投稿の研究によって、初めて実証されるようになった。にもかかわらず、中央の公刊雑誌を中心としたこれらの研究は、依然として「文壇」や「論壇」に連なる公的メディアの枠内にとどまっており、その多くは無名の読み手=書き手として、編集や選考というフィルターを通してのみ、我々の前に立ち現れている。

一方、地方で多くの雑誌が発行され、また互いに交流があったことはすでに知られている。¹しかし、これらの地方雑誌研究は、雑誌の特徴や雑誌間のネットワークを記述する一方、雑誌の内部を構成する同人やテキストに関しては差異よりも同質性に着目して分析記述する傾向がある。もっとも、これには印刷発行された雑誌が持つ公的な性格による面も大きい。「誌友交際」に使われるからこそ、その雑誌は編集のバイアスが強くかかった「よそゆき」の顔をするのであり、内部のやりとりや対立は表面化しにくい。

この限界を補う資料として、本稿は地方の文章回覧誌に着目したい。この資料は「よそゆき」の顔の裏側にある、稚拙な文章や同人間の生々しいやりとりを垣間見させてくれるメディアである。特に、回覧中に付される批評からは、会員の文章に関する意識が決して一様ではないことがうかがえる。文章回覧誌とは投稿された文章を介してコミュニケーションをおこなうツールであり、そこには共感の共同体とばかりはいえない批評的關係があった。

ここで、文章回覧誌を扱うことには史的理由がある。一九〇〇年代までの地方では、文芸テキストを書くという営みは、文章修行の枠内にあることが多かった。学問が立身出世の要となつて以来、その基盤となる文章修行は全国的に行われたのであり、『穎才新誌』はいうまでもなく、『文庫』『新声』『女子文壇』など地方の投稿を多く集めた雑誌のジャンル編制も、そのような文脈を色濃く反映していた。その上、地方では文章回覧誌に参加できる文章能力を持った者は限られており、必然的に文芸愛好者にとどまらない書き手が集まることになった。文章回覧誌に掲載された多様なテキスト群を、「文」もしくは「文章」と呼ぶべきであろう。回覧誌に「文章」の語を冠する所以である。

一方で、本稿が分析対象とする「文学研究会」の「文学」は「理学」の対義語である。²彼らにとって「理学」は科学や数学を指しており、「文学」は、知的領域としての文系に相当する。書き手や読み手の条件次第で、手段としての「文章」とも知的領域としての「文学」とも分光されるようなテキスト群を、本稿は括弧付きで「文学」と呼んでいる。

文章回覧誌に集う会員の情報は、それが地方の歴史文書の中に含まれている場合には詳細に把握できる可能性がある。他の文書と照合しながら当地の人物を調査することで、回覧誌に集う人々の経歴や教養を知ることができる場合があり、会員の動向を追うことによって、文章回覧誌によって獲得されたりテラシーの通時的な追跡の可能性も開ける。中央の雑

誌投稿中心の読み手＝書き手研究は、メディアの共時的分析の一環としてなされることが多く、投稿していた書き手たちがその後どのような活動をしたかは不明な場合が多い。したがって、獲得されたりテラシーがいかに活用され、また変容していったのかという通時的な分析も難しかった。地方の文章回覧誌には、出郷者がいる一方で、地域に滞留して地域社会に何らかの形で関与している者も多い。文章回覧誌の主な担い手だった、いわゆる「青年」層の通時的な追跡研究にも道を開く可能性があるだろう。

以上の観点をふまえ、本稿では福島県耶麻郡関柴村（現喜多方市）で一九〇〇年前後に活動していた「作文会」とその後身「文学攻究会」の回覧誌『文の友』『文の千草』『深山の花』を分析例としてとり上げる。³一九〇〇年前後という時期は、民権運動期から一八九〇年代の民友社や政教社を中心とした青年層の変革期を通過して、新しい文芸ジャンルを含んだ「文学」を読み書く青年が地方に族生した時期である。小木曾旭晃『地方文芸史』（一九一二年）は、一八九八年から「地方文壇」の記述を始めている。会員は関柴村近在の高等小学校を卒業した青年たちで農家・教員・役場職員を中心とするが、「高等小学校卒」という学歴が地域の中で安定したキャリアにつながらないということもあり、複数の社会的文脈が会員の生活にも回覧誌内部にも交錯している。文学青年・政治青年などと単純に色分けすることは難しい。本稿では、学歴や職能による会員やテキストの分節化とは異なる分析モデルとして、複数の「志向」が回覧誌・会員・テキストに混在しているという見方をとりたい。「志向」は立場や行為を規定する特定の傾向である。ただし、回覧誌・会員・テキストをいずれかの「志向」に一元化するためのものではない。複数の「志向」が回覧誌・会員・テキストの中に折りたたまれており、条件によって前景化されたり統合されたり併置されたりする。回覧誌のみならず、会員個人や、テキストの内部にもそのような「志向」の複数性がある。「志向」は一定の職能や学歴などでは分析しきれない事例の動態を観測するために付けられる複数のタグであり、それらが回覧誌・会員・テキストの内部で絡み合っていく動態を分析することが本稿の主眼である。このタグは対象や目的によって任意に設定可能であるが、本稿では特に、一九〇〇年代の地方で、近世期の文と思想の既存の結び付きが、新たなリテラシーの習得によって変容・解体していく歴史的過程を反映すべく、「志向」を近世期の思想類型に求めたい。それは、自発的システムを志向する朱子学に代表される「秩序」、良心に基づく行動を志向した陽明学に代表される「実践」、娯楽を志向した文芸や遊芸に代表される「遊び」、起源にさかのぼって字義を解釈する古学や国学に代表される「訓詁」の志向になるだろう。これらのタグの組み合わせがどのような動態を示すのだろうか。

文章回覧誌は文章修行という目的からも「訓詁」の志向が前景化しているといえてよい。「訓詁」は主に漢学で用いられる用語であり、遡及的に字義や語義を追求することによって、本来あるべき語義へと到達しようとする傾向であり、文献の遡及的な探求を必須とした。本稿ではこのような遡及的な語義主義を「訓詁」の志向と定義する。「訓詁」は古きものとして地域社会から早々に消滅したわけではなく、他の志向と対立や併存を重ねつつ、その後もさまざまな社会的実践や言語的实践の中で生き延びていった。本稿は、近代の読者研究や青年研究では等閑視されていた「訓詁」の志向に着目しながら、それぞれの「志向」が交錯した文章回覧誌の具体相をとらえ、地方青年の言語活動の共時的・通時的分析をこころみたい。

二 「作文会」「文学攻究会」の地域的条件

「作文会」「文学攻究会」は、一八九八年八月から一九〇四年二月まで関柴村で活動していた文章の訓練を主要な目的とする会であり、回覧誌と会員の会合を中心に活動していた。当時の作文雑誌には、文章研鑽の会の結成をうながす言説が見られる。

文友会の目的は、諸子が文筆の錬磨にあり。其組織に就きては、如何やうにても可ならむ。たゞ五人なり十人なり、毎月若しくは毎週に、或は予め題を定めおきて各々経営惨憺の作を持ち寄り、或は会合の席上にて即題によりて一筆直下して数百言の文を綴り、之を会員相互に順見して、公平に批評を加へ誠実に誤謬を正して、憚る所なく恕する所なく、以て兩三年に及ばず、諸子が胸中の佳作は、忽ち金玉の声を発ちて紙上に躍出するに至らむ。(中略) 文友会は、文筆を錬磨すといふ目的以外に、また知識を交換し交情を密にすといふ美果を結はむ。

(楽浪漁史「文友会を興せ」『作文之友』三卷一〇号、一八九七年一二月)

「文友会」は、「文筆の錬磨」と「知識を交換し交情を密」にすることが目的とされている。このような会は各地の条件によって様態が異なる。まずは、「作文会」「文学攻究会」の成立要件となった地域的条件を明らかにしておきたい。

「作文会」は菊池研介(号は風月庵陰人、可香など)と風間悌三(号は愛董、文の舎など)という二人の教員によって始められた。二人は喜多方高等小学校を卒業後、平林尋常小学校の「雇」教師となり、さらに准教員養成所に入所した。一八九八年七月、菊池は准教員の検定試験に合格するが風間は失敗し、翌八月に「作文会」が結成された。この経緯は、風間にとっての「作文会」が、免許取得のための学習会的な位置づけであったことを想像させる。回覧誌での風間の発言は菊池に半ば師事するようなものが多かった。同年九月一日に回覧誌『文の友』一号が発行され、四号からは『文の千草』と改称した。一九〇〇年三月には、『穎才新誌』に投稿歴がある小杜愛水を擁していた「硯友会」を吸収合併した。この間、二人が一年違いで応召したが会は継続された。しかし一九〇一年七月から一二月まで雑誌の編集は中断し、「作文会」は存続の危機に立たされた。「作文会」が「文学攻究会」として再開するのは菊池が兵役を終えた一九〇二年一月である。規定も一新され、回覧誌も『深山の花』と改められたが、一九〇四年二月、回覧誌を印刷発行する計画が持ち上がっていた矢先に日露戦争が勃発した。菊池と風間が応召し、風間は戦死した。戦後、「文学攻究会」は再開されなかった。

会員は、喜多方高等小学校を卒業した関柴村近在の三四名の青年男子であった。当時、近隣の中学校は会津中学しかなく、また尋常師範学校は福島にあったため、喜多方高等小学校卒は地域の中では高学歴に属する。会員の家柄も肝煎家や法印家が生まれ、一〇名が大正、昭和戦前期にかけて村会議員や三役をつとめた。関柴村村長と隣村の熊倉村村長も輩出している。この文章会に集った青年たちが、戦前期までの農村を主導したのである。名望家層の子弟と一応は分類できるが、回覧誌から読み取れる彼らの教養や境遇は、決して均質ではない。

教員で尋常師範学校正科に進学した者はいない。「福島県尋常師範学校生徒募集規則」では、耶麻郡からの募集は八名となっており、郡戸長からの推薦による入学者以外の、入学試験による入学はきわめて狭き門であった。一方で、小学校教員は慢性的に不足しており、まずは高等小学校卒業生を中心に教育能力があると認められた者が「雇」の教員として教育にたずさわっていた。そこから小学校准教員講習科を経て検定試験に及第して准教員になり、さら

に尋常科小学校正教員の免許を得ることができる二年修了の尋常師範学校簡易科があった。また、現職教育の場として講習科があり、正教員の免許を得る足がかりとすることができ、菊池はこのコースをたどった。⁴「雇」から正教員になるための試験や講習を全うできる人材は限られており、会員の多くが教員から他職へと身分移動した。

投稿規定で「自作ノ文章ニ限ラズ有益ナル文章ハ続々掲載セラレタシ」と、手持ちの文章を共有する方針が示されたことで、古典の抜粋が回覧誌の中で大きな割合を占めるとともに、評で字義や文法等の質疑応答が活発に行われた。また、『文の友』三号（一八九八年一〇月一日）では規定が改正され、質疑応答の欄も別に設けられることになった。当然、このような会を主導していくのは和漢文の知識と蔵書を多く持つ者であった。例えば、関柴村役場書記の五十嵐昌喜（号は涼風など）は二本松の岩代以文会⁵で和歌が入選するなど韻文では一目置かれていた。菊池安記（号は花月庵陰人など）も和歌の他に謡曲や生け花を習得していた。⁶佐藤佐吉（号は白菊、紫芳など）は、後に小学校校長から関柴村村長になり、戦前から戦後にかけて二十年以上村政を司ったが、会員時代に「雇」教員から帰農し、さらに師範学校簡易科を出て正教員になるという身分の変転を経験していたにもかかわらず、その勉学の過程で触れた古典を多く転載した。⁷また喜多方で明治二〇年代から中等の漢文教育を行っていた猿橋蓬の漢学塾に通っていた者も数名おり、その一人だった宇津木定衛（号は柳月庵）は、いったん准教員から帰農した後、喜多方の斎藤才八の塾に入り、師範学校受験を目指す過程で古典を転載した。⁸菊池も喜多方町の歌人の指導を受け、生け花の指南も受けていた。⁹彼は後に会津郷土史家の草分けとなるが、その蔵書もこの頃から集められていた。

さしあたり、「作文会」「文学研究会」周辺で文芸的教養を身につけるには、旧派和歌の教養に接続する必要があった。村役人クラスの教養として和歌の教養が受け継がれていたと考えられる。また、生け花や謡曲も地方名望家の教養といえる。この会の場合は、近世期からの芸事が地方青年の文芸活動の基盤となっていた例であろう。一方、猿橋塾生が複数いたにも関わらず、漢文の掲載は低調である。¹⁰自作は少なく、白文には「漢文の何物たるを知らざる余には何にが何やら一向に読めないから作者幸に句点でも施して投稿せられよ」（「後漢楊震」、年代不明）という評が付いた。地域の教養とリテラシーは、地域文化人の存在や教養の継承環境によって左右される。地域の教養の質的な違いは、中央の投稿雑誌からは読み取りがたい事柄である。

一方、風間は母の再婚で次期村長の養子となるが、成人後に旧姓を名乗って分家した。「愛董小伝」では「わび居」と記されている。¹¹当然蔵書を構築することなどできず、和歌の手ほどきを受ける機会もなく、菊池らとは文化資本に覆いがたい格差があった。風間は彼らに誌上で和漢文の転載を求め続け、熱心に教を乞うた。菊池や佐藤らが早々に検定試験を通過して昇進していくのを目の当たりにしながら、持たざる者の焦燥を感じていたことは、彼が残した新体詩や「美文」、小説に見ることができ、中には「商業家」になることを夢想するものもある。¹²文章回覧誌では、中央の投稿雑誌が幻出する青年同士の共感の共同体の下層にある、社会的・文化的格差が露出するのである。

三 「訓詁」志向と蔵書形成

しかし、一方でこの格差を埋める努力もなされていた。「有益な文章」の転載という投稿規

定にしたがって、菊池は「群書一斑」の連載を始めた。これは菊池が所蔵する和漢書の解題とともに本文の一部を転載するものだったが、風間は「コレ可香君ガ蔵書中ノ万分一ヲモ投載セラレザルコト、思フ(中略)続々御投稿アランコトヲ切望ス」(『深山の花』二卷一〇号、一九〇三年一〇月八日推定)と、この連載を歓迎した。

風間は「続けて会員間の蔵書の開示と貸与を提案した。

珍らしき書及び有益なる書を会員相互に交読せられては如何なるものに候や(中略)珍らしき書籍購求せし折や有益なる書籍所持せられしときは其旨本誌に掲載せらるゝことゝ致し互に交読致し候はゞ大に利益あらんと存じ候先づ小生より申上候

一、大町桂月著 春草秋草 壹冊

一、中山、秋月、高桑三文学士共述 東洋史講義 壹冊

一、中学文壇 秋期臨時増刊 壹冊

一、中学世界 第拾三号(十月十日発行)

一、鷹野勇雄編 新撰国文問答 壹冊(中略)

一、大槻文彦著 文法教科書 上下貳冊

其他雑誌類数種有之候。

右御申込み有之候節は何時なりとも御高覧に供すべく候

右 愛董生

(『深山の花』二卷一〇号、一九〇三年一〇月八日推定)

蔵書開示は菊池の相談を受けて風間が会告で提案した。この記事には即座に賛成の評が書き込まれた。次いで菊池が蔵書を開示した。内容は「教育部 十七部 二十一冊、理学部 十七部 二十一冊／文学部 百六十五部 二百八十冊、史学部 二十一部 五十一冊／紀伝部 三十三部 四十八冊、図絵部 十六部 十七冊／雑書部 三十四部 四十四冊、其他数部計三〇三部余四八二冊余」(『深山の花』二卷一〇号、一九〇三年一〇月推定)である。風間の乏しい蔵書との格差が際立つ。菊池の蔵書は現在散逸しているが、書目は五種の目録として残されている。¹³そこからは「訓詁」志向を持った地方教養人と、近代の叢書出版との関係をうかがうことができる。菊池の父研吾は俳人として知られていたが、目録に記載されている限りでは、父から受け継いだらしき蔵書はごくわずかである。「以呂波目録序」(一九一一年)にも「予家元無書只有道春点四書庭訓往来百人一首像讚抄耳」と記されており、蔵書の大半は明治期に出版された予約出版の叢書であった。最も古い目録である『以呂波目録文学部』(一九一一年)に記載された叢書は『史籍集覧』『続史籍集覧』『本朝六国史』『存採叢書』『百家説林』『日本文学全書』『日本歌学全書』『国文全書』『俳諧文庫』『新編御伽草子』『墨水遺稿』『故実叢書』『(袖珍)名著文庫』『続々群書類従』『国文注(註)積全書』『大日本古文書』『賀茂真淵全集』『漢文大系』『随筆大観』である。「以呂波目録跋」(一九一一年)に、「おのれ書あつめはじめてより今茲まで十五の春秋をむかへし」とあり、一八九六年頃から菊池の蒐書は始まっていた。地方への書籍流通網をいち早く整えた博文館の『日本文学全書』『日本歌学全書』や、手堅い予約出版で販路を広げた吉川半七の『百家説林』などから始まったのであろう。明治期に矢継ぎ早に出版されたこれらの叢書・全集類の顧客として、和漢古典に対する「訓詁」志向を持った地方の教養層がいたと考えられる。¹⁴坪内逍遙は一八九〇年頃の翻刻物について次のように述べている。

古文学の翻刻は、国語学の興隆に伴ひて起これるにて、一方に於ては、欧化派に対する

国粹派が反動の余響なりといふべく他の方に於ては、元禄の俗文に対する、雅文派が反動の余響なりといふべし、夫の珍書熱の如きは、実にまた其の余響なり。奈良朝の文学、鎌倉時代の文学、足利期の文学、徳川期の随筆など、種々の史料と共に、陸続として梓に上れり、(中略) 思ふに、此の第三期の翻刻は、明治文学の素を作るものならん。

(坪内逍遙「死灰再燃」『早稲田文学』二号、一八九一年一〇月)

「古文学の翻刻」は、モノとして必ずしも継承されて来なかった文芸・学芸の文化資本が、明治期の活版印刷による書物の小型化と出版流通網の整備によって、「国語学」に傾倒する教養層とともに、各地に蔵書という形となって現れたということでもある。菊池による蔵書目録の「跋」はそのあたりの消息を伝えている。

露月庵のあるじのをり / \ とぶらひきておのが書見るごとにあはれ昔の書に改めたらんにはいく巻にかならん今は活版てふことはじまりて文字も無下に小さくなりまたいく巻をも集めて一冊となすになんせめて巻の数なりとも知らまほしなといはれきげにさなりけりこの小さき文庫の片すみにつみをくなれど昔の書ならましかば棟にも充つべきものぞいかで巻の数をもしらまほしと思ひ出でぬ

(「跋」『以呂波目録』下、一九一一年三月二五日)

菊池はこの目録を叢書の冊単位ではなく作品ごとに記載した。活版洋装本によって蔵書形成するとともに、それを目録ではあえて和本の数量に変換させてみせている。「訓詁」という過去への遡行は、近代の活版による情報密度の向上、出版資本の拡大と流通網の整備による書物の安価な供給によってこそ可能になった。この逆説こそが地方の「訓詁」志向を活性化しているのであり、近代的な事態といえるだろう。菊池は自分の文庫を「花鳥風月葺文庫」と名づけ、郷土史家となった後に私設図書館として公開することになる。¹⁵

四 「訓詁」と「文学」

印刷発行された雑誌と回覧誌とが最も大きく異なる点は、余白を使ったコミュニケーションにある。この会も当初から「批評及ビ添削ヲ挿入スベキ余白ヲのこすコト」という規定があった。そこでは掲載された文章に対する共感や反感が記されるとともに語彙・文法・表記の訂正や質疑がなされた。

評 文字及び仮名つかひの誤謬は些細に似て決して些細の事に非ず是を毫厘に誤らば意味実に通ぜざるに至ることあらむ(中略) 吾兄の文中常に不穩の字句多きはまた窃にをしむ所なり(中略) 本会の旨趣に基き敢て蕪言を呈す

(飄遊生(宇津木忠介)「福発家着の略記」に付された秋峯(佐藤佐吉)の評、『文の千草』一八九九年推定)

文章の上達を目指す会であれば「訓詁」志向が基調となるのはむしろ当然だった。最初の投稿規定では「小説、詩歌ノ国文、漢文、新体詩、和歌、俳句、英文等」とあり、論説文や書簡文などが含まれない文芸中心のジャンル構成となっていたが、会員の文芸テキストはまず語義的な批評にさらされることになった。「訓詁」評は大きく分けて、文法(「伸びるトイフコトナシ伸びトイフ語ハ波行上二段活也而シテ下二にトイフ辞ハ第三変化続体後ヲ受クル辞ナリサレバ伸ぶるトセザレバ誤り也右落合著日本文典ニヨルモノ也」¹⁶)、語句(「少年文ハ「一瓢ヲ携へ云々」の句をきらふ」¹⁷)、そして表現の添削(「此ニ於テ握飯ヲ食ヒ酒ヲ酌シ且ツ舞ヒ且ツ吟ジ各飲ヲ尽ス」(中略)ト改メラレタル方ヨロシカラント思ハル」¹⁸)で

あった。評は、辞書や中学講義録程度のものが参照されたが、その中で原典の記述にまで遡及できる蔵書や伝手を持っていたのが、一部の蔵書家教員や旧派和歌の人脈を持つ会員だった。「訓詁」志向によって文化資本の格差を突きつけられるのが、余白という批評の場であったといえる。

それでは「訓詁」は実際の「文学」の創作にどのように関わったのだろうか。和歌・新体詩・「美文」・小説に関しては、すでに風間が書いたテキストを題材に論じたことがある。¹⁹ あらためて素描すると、旧派和歌の題詠的手法、すなわち、類題に沿った古歌から構築されている「本意本情」に自己をゆだねることで、自己の「実景実情」と伝統的な型を一体化する手法を基本的に用いる。伝統的な美的世界に自己を仮託する、つまり「なりきり」ながら、そこに自己の思いをこめるが、発話自体は自己を基点として行われる。つまり、^{バクテリヤ}仮想現実的な自己語りである。この方法が、和歌から新体詩、「美文」、小説へと援用されていた。ただし、「本意本情」が歌学として構築されている和歌に対して、新体詩その他のジャンルはそれが確固として構築されておらず、断片化された古典の表現を組み合わせることで、文脈を失った表現が接ぎ木される。²⁰この際に、古典の語義を詮索する「訓詁」は、自己を仮託すべき「本意本情」を辛うじて保証する役割を果たす。

しかし、「訓詁」的にテキストを批評する側に立ったとき、その批評は断片化された表現に対する語義詮索となる以上、その先に統合されたテキストの姿は現れず、各断片の文脈へと拡散してゆく。一方でテキスト全体を統合的に評価する方途は、印象による感想しかない。「訓詁」批評の拡散を統合と錯視するには、拡散した文脈を丸ごと包み込む、ありうべき「日本語」という虚構が必要になる。「作文会」が菊池の主導によって「文学研究会」と改まった際、菊池は趣旨として、国語史的研究と、伝達装置としての文章修行という二つの柱を示した。

吾人の日常使用する言語は日本語なり（中略）故によくこの国体と国風とを維持して益々其美を發揮せんも亦日本語の力に抛らざるべからず故に吾人は先づ日本語の結構に通曉せんこと肝要なり

もと日本語は古来単純なる発達を遂げしにあらざ（中略）かるかゆえに今日吾人が本邦の言語文章を習得せんも尋常一般の業能く成し遂る処にあらざるなり依て本会は益々攻究に攻究を重ね深くその蘊奥を探り一ハ以て古来我国言語変遷の一般を窺ひ一ハ以て思想を自由に発表せんことを期す

（（菊池研介）「深山乃花誕生の趣旨」『深山の花』一卷一号、一九〇二年一月二八日）
守るべき「国体と国風」は「日本語」の「結構」という、言語的な基本構造に依拠する。それを確認するために「日本語」の変遷の歴史を探求することが、「日本語」によって自由に思想を表現するためには必要不可欠だとしている。つまり、「訓詁」の知なしに「日本語」の構造を知ることはできず、「日本語」を使いこなすこともできないということになる。ここに当時帝国大学を中心とした「国語学の興隆」の影を見ることができる。直接的には菊池の蔵書にある次のような記述にのっとったものと考えられる。

独逸の言語学者でフリドリッヒ、ミュルレルといふ人が、言語の研究に三つの目的があるといふことを申して居ります。（中略）第一は交際上の必要に原くもの、第二は古典の研究、第三は言語の研究である。（中略）それで我々が言語を正確に安全に使用する

といふこと許りが、言語研究の唯一の目的ではありません。同時に言語の理論的方面も研究しなければならぬのであります。理論的方面と申しましても、単に言語夫れ自身の研究ばかりでなく、其歴史的発達を知ることが必要である。

(保科孝一『国語学小史』、大日本図書、一八九九年)

保科は、マックス・ミュラーの説を援用しつつ、「言語の理論的方面」の研究のためには言語の「歴史的研究」が必要とし、「言語を安全に使うこと」という伝達装置としての文章の習得と併置する。菊池の趣旨に当てはめれば、言語の「理論的研究」が「結構」の探求ということになる。しかし、あるべき「日本語」を習得するという目的を、「日本語」の「結構」を知るための「歴史的研究」という方法にゆだねたことによって、その答は事実上先送りされる。そして、際限の無い「訓詁」志向は、回覧誌上で「実践」志向からの挑戦を受けることになる。

五 「訓詁」と「実践」

「実践」志向とは、知と行動を不即不離のものにとらえ、思弁よりも行動に移すことを重視する志向と定義できる。「作文会」「文学研究会」には強い「実践」志向を持つ会員がいた。その中心にあったのは宇津木姓の三人の会員であった。宇津木忠次郎（号は錦龍生、柳福山人など）、宇津木忠介（号は飄遊生、椿堂など）は兄弟であり、末弟は先述の定衛である。その縁戚の宇津木多一（号は香雪）は定衛とほぼ同世代と思われ、定衛の紹介によって入会した。定衛以外はやがて出郷するが、京城や関西学院への遊学、キリスト同信会への入会、修養団への入団と修養団活動の一環としての北海道やアメリカへの移住など、異彩を放っている。これは宇津木兄弟の伯父にあたる異色のキリスト教伝道者宇津木勢八の影響があった。²¹

忠次郎の文章には、富者の不正を怒り貧者の道德性を称揚する文章が多い。次の文章はいわゆる「美文」として書かれた。

一個の茅屋はそも誰れの住家ぞ問ふを止めよ世上紛々たる懶惰者流の知らざるもの茲にすめり不正の富と不義の財とに獸慾を恣にせる貴顕紳士の知らざるもの茲に住めり愚にあらず

(柳福山人(宇津木忠次郎)「山家の農夫」『深山の花』一卷二号、一九〇二年二月二五日)

農業に従事していた忠次郎は、農家を貧者とし「貴顕紳士」を不正不義の徒とする文章を書いていた。後の地方青年や在郷軍人が繰り返した、華美な都会への憎悪と醇朴な田舎の称揚という言説の形がすでにあるが、忠次郎はこのような農本主義的な「実践」志向の「文学」を、論説文や警句のみならず「美文」・新体詩・小説としても書いた。忠次郎は、「文学研究会」設立の際に「私共は物の外形にばかり注意して居る人共を逐散し心の清き諸君と共に茲にみやまの花なる文学研究会を建てました」(『深山の花』一卷二号、一九〇二年二月二五日)と、社会の倫理的矯正という、菊池の趣旨とは大きく異なる目的を「文学研究会」に託していた。

ところが、忠次郎は菊池と並んで最も多くの「訓詁」評をする会員であり、「あやまり」という語を連発する評者だった。菊池が「大宮宗司ノ日本文典、落合直文ノ日本文典、石田道三郎ノ国語かなつかひ、本居春庭大人ノ詞のやちまた、大槻氏の言海、日本字林玉篇大成、

会玉篇」を参考として忠次郎の評を正すと、彼は次のように反論した。

堪は也行下二段に活くものとせられしがそも / \ 此堪は波行下二段に活くものであります故に斯くの如き也行などゝは大なるあやまりであります余曾て柳沢淇園の著書を落合博士が訂正したる書にあるを編集員これをひがこととなさば国文本を御覧に入れませうかそれにてても御落意なさずば落合先生に照合致したきものであります

(「思ひつき」『深山の花』第一巻第三号、一九〇二年四月五日)

忠次郎の場合は、「訓詁」と「実践」は対立しない。「訓詁」は「実践」を妨げるものではなく、むしろ「訓詁」の「正しさ」に直線的にこだわっており、時に転載された古典文までも正そうとして菊池にたしなめられるほどやみくもなものだった。²²菊池の文献学的な博引旁証とは異質であり、これは、「学会研究会ヲ設立シ風儀頹敗ヲ矯正セン」(「本誌投書家(二)」『愛菫遺稿』下、一八九九年一月二九日推定)という忠次郎の認識とおそらく通底している。つまり、「風儀頹廢」以前のあるべき姿は先験的に存在するのであり、人々をそれに合うよう「矯正」するために「學術」がある。同様に語を使うという行為に当たって拠って立つべき正しさも先験的に存在し、それは古典にすら優越する。これは、「実践」というよりは理を重視する「秩序」志向に近いのかもしれない。しかし、ここで忠次郎の「訓詁」志向を他の志向に回収して一元化してしまうよりは、忠次郎の中で「実践」あるいは「秩序」と「訓詁」が先験的な正しさの追求という一点で併存しているという点を重視したい。忠次郎はやがて出郷し京城に遊学するが、早くに地域外の知的環境に触れていた次弟とは、この点に明確な違いがあるからである。

次弟忠介に至って、「訓詁」と「実践」は明確に対立する。

可香君の国語的文章毎号に見ざるなし、君の国学に通ぜる事予は固より此れを知る然れども予は患ふ、保守的傾向ある事を君よ願ば国語に呑まるゝ勿れ却て国語を呑め尚ほ進んで君よ泰西の学を修め西洋の人情風俗等をも学べ若し君然らんには君の思想益と卓絶せむ

(宇津木忠介「菴の舎可香君の「清見が関補遺」に対して」『深山の花』二巻一〇号、一九〇三年一〇月八日推定)

ここで、忠介は菊池の「訓詁」志向を「国学」とし、「保守的傾向」と見る。これには忠介の経歴が大きく関わっている。彼は坂下町で医学を志していたが、病のために帰郷した後、関西学院に入学する。英学や哲学を学び、それらの知識を回覧誌上に披瀝していた。英学を学ぶことによって、開化論的な新旧と和洋の優劣の図式を受け入れ、「国学」＝「保守」に対抗する学として「英学」＝(進歩)が意識され、「無用」「有用」の価値判断をすることによって、はじめて「訓詁」志向と「実践」志向は同じ水準で対立することになった。これは長兄にはない視点だったが、和漢の学が中心だった地域の教養と、都会の西欧的教養の質的な違いによって生じた差異であろう。近代日本の教養が、学校教育によってただちに均質になったわけではない。

さらに忠介は「国語に呑まるゝ勿れ却て国語を呑め」と述べる。「英学」という新たな選択肢を前に、学問の水平的な拡がりの認識に基づいた学問選択の主体性を求めた言説といえるだろう。菊池が、「グレーの悲歌」を独自に翻訳する英語力を備えていた²³にも関わらず、「国体と国風」「日本語」という起源遡及的なアイデンティティを頂くことで「訓詁」を不可避の方法とするのに対して、忠介の視座は学問の選択可能性の一つとして「訓詁」をと

らえるものであった。

多一に至っては、「訓詁」を旧弊として排除する。多一は河沼郡川西小学校で教員をしていたが、学校の蔵書が天保以来の古書であることに「進取ノ氣象」が養えないと不満を述べた。²⁴それに対して菊池が「書籍ノ古ヲ嫌フ弊ハ大ニ悪ムベシ新強チヨシトセズ古強チスタレタリトナサズ」と書き込んで古書を擁護し、多一が「君等ノ如クフルト\シイ古物古代ノ著書ヲ弄シテ研究シー向ニ進取ノ氣象ヲ養フ等ノ意識ノナキ輩」とさらに書き加えて古書を役に立たないものとする趣旨の返答をしたことで、「進取ノ氣象」をめぐる論争が始まった。

特に多一に対して強い批判を浴びせたのが、風間であった。文化資本の格差に呻吟していたにもかかわらず、風間は「訓詁」志向を擁護する。彼は「翻訳書の如き我邦の語格に違ひ、文法にもとれる直訳体、新聞雑誌体の文章を研究せんよりは古文研究の如何に価値あるか」と、訳書の文体の乱れを指摘して「古文研究」を推奨する。菊池の「日本語」の「結構」という理念に依拠しているとも読める。そして「パイロンシセレー (=シェリー)」を「不健全」とする一九〇〇年代の「不健全」文学の紋切り型をなぞった上で次のように述べる。

詩人とか、美文家とかにならんとするものには至極適切なるかやも知れざれども、他の職業殊に教育の方面に立脚地を得んとするものはかゝる西洋学に心酔し国文を排斥するは不為ならんと思ふなり (中略) 進取の氣象とは読んで字の如く進んで取るといふ氣象に外ならず、然らば真の進取の氣象とは如何、予は一言以てこれを尽すことを得曰く「真摯ノ心堅忍不拔ノ志胸中ニ満蓄シ笑テ万難ヲ迎ヘ優々乎トシテ余裕アルモ敢テ之レヲ誇ラズ、真理ヲ取り、正通ヲ踏ミ進ンデ研究セントスルノ氣象ナリ」

(文廬舎愛董 (風間悌三)「第拾貳号香雪君の評を読みて」『深山の花』二巻一三号、一九〇三年一二月二五日)

この風間の論法は興味深い。まず役に立たないとされる「古文研究」に対し、役に立つとされる「西洋学」を、パイロンなどと接続して「不健全」なものと読み替え、それをさらに「詩人」「美文家」に接続する。不道德性と文学者の組み合わせに対して、「古文研究」を「教育の方面」と結びつけて有用性と道徳的な健全さを主張する。「訓詁」の志向が教育の「秩序」志向と結びつけられることで、有用性と道徳的優位性へと反転するのである。そのようにして「西洋学」を貶めた上で一歩引き、あらためて「進取の氣象」は有用性の測定と切り離された一般論としての教訓に再定義されるのである。風間は会員の中でも最も多く「美文」や和歌・新体詩・小説を書いていた。しかし、准教員を目指す立場にあった風間は、論争の場では「秩序」志向の「教育」者になりきり、「文学」から「不健全」な「文学」を切り分けて排除することで、「訓詁」志向を擁護したのである。

ところが、多一は「不健全」な「文学」に当たるテキストは書いておらず、論説文と記事文を書いていた。彼は文芸テキストを書かなかった一方で、次のような論説文を書いていた。

私は道徳の衰頹について少しく余の考を一言しやう我日本の道徳今日の儘で何時迄もつツかば日本の将来は如何でせう実に痛嘆に堪へません我国徳義衰頹の様子は私の申すまでもなく上は大宰相の任に当るも、下は幾多の人士に就て目今の行為を見たら一目

^(ツツ)
僚 然でありませう斯の如く衰頹に傾きしは何がためか之を救済するには如何すべきか是れより余の意見を述べませう

(香雪山人(宇津木多一)「道德の衰頽に就きて」『深山の花』二巻五号、一九〇三年五月一日推定)

多一にとって自己の考えを表現できるのは論説文である。題詠的な文芸テキストが型に自己を預けることによってきわどい自己表現を行っているかたわらで、情念を交えつつ直接的に自己の主張を吐露する論説文があった。同時代の文章作法書が実用文と美文に分節化しているようには、青年の論説文はとらえられない。また、引用では口語文体が使われているが、多一の他の文章では普通文が使われており、口語文のみを自己の内面を現前化する文体と評価するわけにはいかない。普通文も古典の桎梏がない新造語としての漢語を、訓読の響きに載せることで自己表現できる文体だったのであり²⁵、口語文も普通文も、むしろ旧派和歌の影響下にある「文学」では表現しづかった自己の直接的な表現が可能な文体だった。

「実践」志向を前面に出した三人に対し、末弟定衛は「訓詁」志向を擁護する姿勢を見せた。もっとも、定衛は決して「訓詁」の志向ばかりに染まっていたわけではなく、創刊されたばかりの『成功』を購読していた。そして、菊池の「訓詁」の知識に私淑していた風間も、定衛から『成功』を借りてロックフェラーらの成功談に感激し、「厭世」への停滞を脱することを決意する一面を見せていた。²⁶定衛にも風間にも「実践」の志向があったのである。しかし定衛は当時、平林小学校教員から帰農するという状況になっていた。ここには兄二人の出郷が影響しているであろう。定衛の文章には、「嗟呼是れ何の罪ぞや勉めざるの報いなり」(「時日は最も惜まれて」『深山の花』二巻七号、一九〇三年七月二四日)と無念の響きがある。定衛は多一が忠介の新しい教養に傾倒することに対しても「香雪君ノ此ノ言余少シモ感服セヌ神戸ニ居ッタカラトテ関西学院デ学ブカラトテ如何シテ高尚又ハ思想ガ確実ダト云フガ出来ヤウカ」と冷淡であった。このような屈折を経て、定衛は師範学校受験準備塾である斎藤塾に通い始め、師範学校正科の合格を目指したが視力検査で不合格となる。しかしその後小学校教員に返り咲いて地域にとどまった。一方、多一は後に福島県尋常師範学校に在籍したが、そこで修養団の福島県師範学校支部幹事となり²⁷、一九一一年一〇月に米国に渡航し、ロサンゼルスのアレキサンダーホテルで職を得た。²⁸これは修養団の活動の一環で、多一は渡航に当たって修養団の支持者であった渋沢栄一と会見している²⁹。

「訓詁」を旧弊なもの、役に立たないものとして排除するような「実践」志向が、出郷者の教養との接触によって生じてきたことが見て取れるが、一方で地域に滞留し、特に地域教育にたずさわる決心をした青年たちにとっては、検定試験や地域での文化的ヘゲモニーという点からも、「訓詁」の志向はいまだ意味あるものであった。最後に、菊池のその後を追跡することで、「訓詁」志向の帰趨を確認したい。

六 「訓詁」のゆくえ——結びにかえて

菊池は、歌集や随筆集のほかに、和漢文学(『解題文学略史』『古物語管見抄』等)・略伝(『慶長以来国学家略伝拾遺』等)・目録(『平家物語目録』等)・有職故実(『有職故実微抄』等)・郷土史(『関柴村風土記』等)を研究した稿本を編んでいたことが、残された蔵書目録などからわかる。「訓詁」志向による文献の遡及的な探求が、有職故実や郷土史にまで及んでいた。しかし、菊池の考証は種々の断片的な情報を集約分類し解題を作ることまではできるが、まとまった文学史や文学論として論理化されることはなかった。菊池が過去の自作の文章をまとめた『葎庵文集』(一九二七年)に収録された『解題文学略史』の序で菊池は、

文学史の攻究は至難の業であり、その前段階の解題を連ねることにしたと述べている。彼の「歴史的研究」は断片化されたまま、「日本語」の「結構」にたどりつくことはなかった。

一方、アカデミズムの場で国文学の研究は進み、国語教育の整備とも相まって、在野の研究は公式の国語学や国文学に回収されるか、孤立したまま忘却された。菊池は一九一四年に小学校を依願退職するが、その際の「退職辞」（『葎庵文集』）には「浅学なるも日々の教授に於て殆ど参考書の要なきを以てこれを手にすること稀なるを以て一面懶惰者と誤認せられ」とある。ここには「訓詁」の知識を養ってきたことへの強い自負が読み取れる。だが国語教育の場でも、すでに教育課程に則した指導用参考書が使われるようになっており、自力で文献を渉猟した世代は、すでに過去の存在となっていた。

退職した菊池は郷土史家となり、会津資料保存会を立ち上げて会津の郷土資料をほぼ独力で蒐集し、『会津資料叢書』正統（一九一七年～一九二七年）などの刊行に至る。嘱託として『若松市史』（一九二〇年成稿、一九四一年～一九四二年刊行）の編纂にもたずさわった。アカデミズムの下に収束していった国文学に対し、在野の研究に残されたのは郷土史誌か方言・俚謡研究だった。このような郷土史家の断片的な情報を集約・統合して民俗を語ろうとしたのが柳田国男であった。しかし、文書史料の限界を前提にする柳田に対し、菊池の郷土史研究は文書史料が中心であった。菊池自身は柳田と接触することは無かった。

むしろ菊池は地域の碑文の文案を請け負うことで、国民国家とつながる地域の新たな史跡に文章を刻んだ。³⁰また、地域や国民の同一性を確認する行事の場での地域有力者の演説を、多数代筆していたことも『葎庵文集』からわかる。『若松市史』の市長序文も彼が代筆したものだ。そこでは和漢の古典から引用された表現が駆使される。「訓詁」は地域社会のアイデンティティと統合の感覚を確認するために必要な知識として、少なくとも昭和戦前期までの地域社会の維持に貢献した。

菊池は退職と前後して関柴村の在郷軍人会分会長になった。すぐに風間悌三を戦没者として公式に慰霊する。その際、菊池は私に回覧誌の綴りを解き、風間の遺稿集『愛董遺稿』として編み直した。そこに記した「愛董小伝」の末尾を菊池は次のように締めくくっている。

あゝ君が一生は二十有六年不遇なりき君が養家は生計豊ならざれば君をして読書自由ならしめず学一方に偏せるを以て応試に第せず世に阿らざるを以て軍に従ては一等卒に終られきかつて往来談笑せし君が住家は今既にこぼたれて荆棘茂るたゞ君の生涯を語るものは菩提所境内墓標一基元としてたてり噫

田山花袋『田舎教師』を彷彿とさせるが、風間は「読書自由ならしめず」という言葉とともに、「訓詁」の知識を思うように得られなかった存在として、不遇の青年を悼む物語に回収される。しかし、菊池の「訓詁」志向の文脈に絡め取られるかのように見えながら、回覧誌の文章を寄せ集めた遺稿集には、『成功』に感激し商業家を夢見る「実践」志向の風間も混じり込んでいる。文章回覧誌はその断片性によって、むしろ無名の読み手＝書き手たちの立場や行為の多元性をより深く考察するよすがとなる。

研修先：人間文化研究機構国文学研究資料館

研修期間：二〇一九年四月一日～二〇二〇年三月三十一日

指導教授：谷川恵一

- ¹ 長尾宗典『〈憧憬〉の明治精神史 高山樗牛・姉崎嘲風の時代』、ペリかん社、二〇一六年
- ² 「理学ニ関スル投書ハ折角ノコトナレドモ没書トスソハ会則ノ容レザル所也尚理学研究会ヲ設計スベケレバ諸士之ヲ待テ」（「会告」、一九〇二年～一九〇三年推定）
- ³ 「作文会」「文学研究会」資料は福島県立図書館が主に所蔵している。資料・会の沿革については、
「明治期地方文章会の活動（一）—福島県喜多方市「作文会」「文学研究会」概要—」、『大妻女子大学紀要—文系—』五一号、二〇一九年三月
で報告した。他に以下の翻刻・解題・論考を発表した。
「明治期地方文学資料の翻刻と解題（一）—福島県喜多方市「文学研究会」資料・『愛菫遺稿』上—」、『大妻女子大学紀要—文系—』四八号、二〇一六年三月
「同（二）『愛菫遺稿』下—」、同右、四九号、二〇一七年三月
「生きながら書く—明治期—地方青年の生活と「文学」—」、『大妻国文』五〇号、二〇一九年三月
- ⁴ 福島県教育については『福島県教育史』一卷、一九七二年。
- ⁵ 安部井春蔭主宰。安部井は会津日新館和学取締役方で香川景恒の学統につらなる歌人。五十嵐の経歴については「本誌投書家（一）」（『愛菫遺稿』下）。
- ⁶ 「会員経歴の一斑」（断片）
- ⁷ 「本誌投書家（二）」（『愛菫遺稿下』）および『喜多方市史』八巻、一九九一年。
- ⁸ 「略歴」『愛菫遺稿』下
- ⁹ 愛菫（風間悌三）「菊池可香君」『愛菫遺稿』下
- ¹⁰ 例外的に自ら漢文評を付した漢文を多く転載したのは菊池である。彼は後に『孟子潜注』などの稿本も執筆しており、彼の「訓詁」志向が漢籍にも及んだことがうかがえる。
- ¹¹ 花鳥風月庵主重匡（菊池研介）「愛菫小伝」『愛菫遺稿上』、一九一五年一二月一七日
- ¹² 木戸「生きながら書く」
- ¹³ 菊池の蔵書目録は福島県立図書館所蔵。
- ¹⁴ 尾鷲の土井幹夫（号は淇水、一八四六年～一九二五年）は著名な名望家俳人であり中村山土井家文庫（尾鷲市公民館郷土室所蔵）を残したが、その日記（一九〇二年七月三日）には、菊池も購入した『故実叢書』第二篇を吉川半七より予約購入した記述があり、同文庫も明治期に出版された叢書が多く見出せる。
- ¹⁵ 「小生多年蒐集したる蔵書を公開し、昨年九月以来図書館となし、花鳥風月菴文庫と称して月六回開館致候、専ら和漢の文学書を集め、殊には会津関係資料を蒐集することにつとめ居候」（菊池研介「余の図書館公開」『会津会報』一六号、一九二〇年六月）
- ¹⁶ 作者不詳「狂にあらずは…」に付された可香（菊池研介）の評、年代不明。
- ¹⁷ 飄遊生「菊花ヲ観ルノ記」に付された妄評生の評、『文の千草』年代不明。
- ¹⁸ 同右、添削生の評。
- ¹⁹ 木戸「生きながら書く」
- ²⁰ 北川扶生子は「美文」の文範に関して次のように述べている。「文範集においては、様々な社会階層に属する書き手が、それぞれに異なる読者に向かって書いた文章は、切り取られ、アンソロジーとして同じテーブル＝分類法の上に並べられることで、そのジャンルが本来持っていた差異を失う」（『漱石の文法』、水声社、二〇一二年）
- ²¹ 宇津木勢八は福島尋常師範学校卒。海老名弾正から洗礼を受けた。大日本海外教育会の朝鮮進出拠点となった「日語学校」京城学堂唯一の日本人「教諭」となった。その後同信会に入り、また朝鮮・満洲での修養団活動に積極的に関わった。
- ²² 「群書一斑 貞応海道記」（『深山の花』一卷二号、一九〇二年二月二五日）に付された評。
- ²³ 風月庵陰人（菊池研介）「グレーの悲歌」『文の千草』五号～六号、一八九八年十一月二

日～一五日。

²⁴ 香雪（宇津木多一）「我が俸職シテ居ル川西小学校ニツキテ」『深山の花』二卷一〇号、一九〇三年一〇月八日推定。

²⁵ 斎藤希史は、漢文から独立した「訓読のリズム」をともなって成立した普通文が、漢語を大量に効率的に使用するための文体として新造語を生産するメディアに用いられるようになったことを指摘している（『漢文脈と近代日本』、NHK出版、二〇〇七年）。

²⁶ 愛堇（風間悌三）「成功を読みて感あり」『深山の花』二卷六号、一九〇三年六月一二日推定。

²⁷ 「修養会彙報」『向上』四卷七号、一九一一年七月

²⁸ 宇津木多一「団友米国だより」『向上』五卷二号、一九一二年二月

²⁹ 「洪沢栄一日記」一九一一年一〇月七日（『洪沢栄一伝記資料』四三卷、一九六二年）

³⁰ 『葎庵文集』には「従軍記念碑銘」「辰徳碑銘」「忠魂碑銘」が収められている。

（きど・ゆういち／大妻女子大学）